

## 10/30 鹿野 行乞の人

### 山頭火

行乞の人

昭和八年十月三十日

、金峰神社秋祭りの"よど"(前夜)のことである。私は数え年で八才であった。

夕方、帰りの遅い祖父を待っていると、やがて祖父は客人を連れて帰って来た。客人というのは、汚  
衣着物の上に埃にまみれた墨染めの僧衣をまとい、大きな笠を被った入であった。

客人のそれを見た家中が、俄かに慌ただしくなった。

「お祭でお風昌が沸いちよりますけえ、お入りなさいませえ」

祖母は客人を家に上げらせずに蕙を土間

に敷き"大ぞうげ"(竹ざる)に着物を脱がせた。

「着替えは風呂の前座敷に置いてありますけえ、ゆっくりお入りなさいませえ」

と言って母は袖まくり腰まで、汚れた衣服を洗濯場へ運び、タライに熱湯を入れた。

「なして、そうするん」

と聞くと

「ノミやシラミが居りそうなけえ」

と言った。

祖母は「どうしてあんな"ほいとう"のような客を連れて帰ったのか」

と怖い口調で祖父に聞いた。

あぶがたれ祖父の話によると、虻ヶ峠まで帰ると、峠の頂上

の草むらに"行き倒れ"が寝て居った。腹が減っちよると言うから、土産の鰻頭を食べさせた。煙草  
はみんなやった。

鹿野へ行くと言うのじゃが、日暮れが近いし、大向へ後戻りさせるのも、かわいそう

じゃった。祭りじゃけえ連れて戻った。

菅蔵から山

越しをした方が鹿野へは近かろう… … などと、虻ヶ峠から連れ帰った訳をこまごまと話してから、  
三田尻(防府)の酒屋の総領息了じゃげな」と言うのと、うそ

「げなげな話は嘘話ちゆうけえの」

と祖母は言い返したが、祖父は

「情けは人の為ならず、あすは我が身と言うけえ、これも縁じゃろうて、え」

と言って、湯上がりがりりでさっぱりした客入を座敷へ通した。

客人は床柱を背にどかっと上座に座り

「まあ一杯、お客入」と、先に来ていた祭り客が注ぐ酒を美味そうに飲

み、注ぐほどに飲む。私は"中の間"の障子の隙間から覗き見していた。

客人は厚手のまん丸い眼鏡を

掛けていた。厚い眼鏡のせいか、目玉が細く細く見えた。

納屋ではジイジイと父が、草鞍を作ることになった。

父は草履は作れるが、草鞆は作ったことがない。

そこでジイジイが昔取った杵柄で作ることになった。

「お祭りの"よど"に草鞆作りとはのう」とこぼしながら二足作り上げた。

明けて三十一日は、祭りの"日の晴れ"である。

客人は旅の法衣に草鞆を履いて旅立って行った。

"宮の峠" を越す姿が見えなくなるまで見送った

が、客人は一度も振り返ることはなかった。

「じいさんが虻ヶ峠から連れて帰ったあの客人は、今ごろ有名な山頭火じゃったんかネ、そうじゃったような気もするけどネ」と晩年の母は、この行乞の人を、そのように話していたが定かではない。